

『金融研究』(第17巻第3号)所収論文の紹介

日本銀行金融研究所では、その研究成果を広く外部に公表することを狙いとして、『金融研究』^(注1)を発行している。以下は、第17巻第3号(平成10年7月発行)所収論文の概要を紹介したものである。

金融研究会「江戸期三貨制度について」

金融研究所では、平成9年12月、江戸時代における貨幣制度(いわゆる「三貨制度」)をテーマとする金融研究会を開催した。三貨制度とは、金貨・銀貨・銭貨の3種類の貨幣が本位貨幣として政府(幕府)によって発行され、しかもこれら三貨間には相互に交換相場が成立し、市場において日々変動していたという世界的にもユニークな貨幣制度である。研究会には、経済史、日本史、経済理論、考古学、分析化学など、貨幣・金融史に関わる多方面の専門家約50名が参加した。『金融研究』本号では、研究会の概要をはじめ、各報告論文とコメントをあわせて掲載している。

本研究会は、3つのセッションに分けて行われた。まず第1セッション「出土銭貨からみた中・近世移行期の銭貨動態」では、江戸期以前(中世後期)の銭による単貨体系とその変質がいかにして近世江戸期の三貨制度へとつながったか、またそうした貨幣動態に、中国から流入した永樂銭や、地方で独自に発行された領国銀貨

がどのように関わったか、などの諸点について報告・討議が行われた。続く第2セッション「近世貨幣の動揺」では、主として17世紀末以降の貨幣改鑄が、貨幣の持つ諸機能(価値尺度、交換手段、富貯蔵)に対してどのような影響を及ぼしたかという視点から分析がなされた。第3セッション「江戸期貨幣制度のダイナミズム」では、江戸期における銭貨利用の実態や、正貨を供給する際の江戸幕府の意図や思惑なども織り込みながら、江戸期の三貨制度を総括的に論じる試みがなされた。

中世～近世初期の模鑄銭に関する理化学的研究^(注2)

本研究では、金融研究所所蔵の貨幣資料について、法量計測ならびに鉛同位体比測定を行った。対象とした銭貨は、日本の中世から近世初期にかけて、中国銭などを模して鑄造した銭貨、いわゆる本邦模鑄銭である。本研究で採用した鉛同位体比分析とは、銅に鉛や錫^{すず}などを混ぜて鑄造された模鑄銭のうち、鉛部分を抽出して化学分析を行う手法で、鉛の同位体の比率によっ

(注1)『金融研究』所収論文の内容や意見は執筆者個人に属し、日本銀行あるいは金融研究所の公式見解を示すものではない。なお、『金融研究』第17巻第3号(定価1,050円)はときわ総合サービス(株)(本『日銀調査月報』刊行物一覧を参照)より販売。

(注2)本稿は、金融研究所客員研究員であった国立歴史民俗博物館の齋藤努助手、同客員研究生であった国立歴史民俗博物館の高橋照彦助手(現：奈良国立博物館研究員)、ならびに金融研究所研究第3課 西川裕一が共同で作成したものである。

て原材料の産地推定を行うものである。それらの分析結果を歴史的に位置付けることにより、模鑄銭の原材料調達に関する変遷が、以下のような3段階として整理できることが明らかとなった。

第1期 島銭に典型的に見出せるように、主として中国産の鉛が原料として使用されている段階（14世紀頃）

第2期 鑄写銭に典型的に見出せるように、

中国産の鉛が使用されたものと日本産の鉛が使用されたものが混在する段階（15世紀頃）

第3期 加治木銭・叶手元祐に確認できるように、若干海外産の鉛を含むものもあるが、基本的には中国産の鉛ではなく、日本産の鉛が使用されている段階（16世紀～17世紀初め頃）